



「……し、べらあ憶記に衣上此もに同一……」

乙市民 お下りなされ。

とアントニー嬢を下り屍骸  
の枕邊に立つ

丙市民 いかにも一同承知の上ぢや。

丁市民 サア、環を作つて、圓く並べ。

甲市民 柩へ寄るな、御遺骸へ觸るまい。

乙市民 アントニー公の席を明けい、ヤ

レ、アントニー公は貴い方ぢ

や。

ニアント コレ、其様に詰め懸るな、

後へ、

大市民 後退れ、席を明けい。

ニアント さて一同には、涙あらば只今流す用意を致されよ、見られよ、一同にも此上衣に記憶あるべし、嗟想ひぞ出つる、折しも夏の夕、恰もネルヅ非の蕃族を、平定なしたる當日の事なりしが、陣幕の中にて初めて之を着されたを、拙者は未だ忘れも致さぬ、見られよ此上衣の表の、これなる傷は、カツシアスがヒ首の透りし痕、又これなるは、勇猛無比のカスカが刀痕、又これなる傷口は、御寵愛のブルータスが劍の通ひし路、いかに人々、其時シーザー公の御血潮が、刃の後を追かけて、さつと迸り出でたる痕に目を留めよ、只今公が御胸の扉を叩きたるブルータスは、殺意あつてかさもなきか、様子如何にと見届けひと、戸口を走り出でたる風情、思うても見よ、彼のブルータスが、シーザー公の厚き



御寵遇を蒙りしは、一同も承知の通りならずや——想へばシーザー公には、飼犬に御手を噛まれしも同然、されば此數ある御負傷の中で、是に増す御深負傷はなし、さてこそ御寵愛のブルータスが己を刺すよと見られし時、シーザー公の御胸には、日頃かく迄恩寵を加へし者が、忘恩背徳の舉動に及びしかと、後悔の念が一杯で、其外の叛人共が、太刀劍の傷よりも、其御無念故に御落胆、彼の太祐な御心も沮喪して、御上衣を以て御顔を掩へしまゝ、血潮の飛沫に漬りつる、ボンペーが彫像の臺下に敢果なき御最期、おゝ人々、こはそも何の最期ならむ、嘗に故公一人の御最期にはあらざるぞ、かく申すアントニーも、汝等一同も早やこれにて羅馬市民の最期を遂げしなるぞ人々、今や非道の叛人横行して羅馬は闇、おゝ一同にも泣かるゝか、哀悼の情を催さるゝ

と見えた、それこそ汝等が善心を泣く涙、優しの人々よ、乍去汝等にはシーザー公が、衣服の傷痕を見たるのみにて、早や其様に泣かるゝか、此處を見よ、逆徒の劍に抉られたる、コレ此御肌膚を覗かれよ、

甲市民

おゝいたましの御有様。

乙市民

おゝ彼の高偉いシーザー公を、

丙市民

何といふ悲しい事ぢや。

丁市民

えゝ逆徒奴叛人奴。

甲市民

淺ましい有様ぢやなア

乙市民

此仇は取らにやあ措かぬ。

大市民

サア、復讐ぢや——出懸ろく——探し出せ——焼いて仕舞

へ——殺せ——屠れ——逆徒一人も生かして置くな。



ニアント いや待たれよ人々。

甲市民 待て、アントニー様が物を仰せらるゝわ。

乙市民 アントニー様のいふ事なら承らう、仰にも従はう、我等が命も差出

さう。

ニアント 優しの友よ懐かしの同胞よ、俄かに潮の寄せる様な、一搔三味は  
慎まれよ。此惨事を敢て爲したる人々は、當代の義人君子なるぞ、如何  
なる内密の理由あつて、かゝる所業に及びしか、拙者には合點參らね  
ど、賢慮に富み仁義に明るき彼の人々、汝等がよう合點の參るやうに、  
必ず辯解を致さるゝならむ、聞かれよ人々、拙者は決して汝等が心を  
動かさむとて來りしならず、此のアントニーは、ブルータス如き辯者  
にあらず、一同も豫て承知の如く、たゞく友誼に脆き、朴訥野鄙の木

強漢、彼の人々とても、かくと承知の上なればこそ、かく公けに此拙者  
が、シーザー公の御身の上に就き、一同に語るを許されたれ、此拙者は  
人の血を亂すべき頓知も頓才もなく、辯舌も音聲も持合はさぬ、只だ  
有のまゝを語る外に能もない、只汝等に申せし所も、既に汝等の知れ  
る所を反覆し、さては故公が御傷口といへる、無言の口を指し示し、拙  
者が詞に代へたる次第、乍去若し此アントニーと、彼のブルータスと  
が入違へ取替つたなら、此アントニーは、辯才を以て汝等が精神をか  
き亂し、シーザー公が御傷口には、一つく舌をつけ、羅馬中の石礫  
をさへ、奮ひ立たせずには措きはせまい。

大市民 いや我等とて、此まゝには濟まされぬ。

甲市民 ブルータスの家を焼いて仕舞へ。



丙市民 サア〜出懸けやう、叛人等を探し出せ。

ニアント いや待て、まだ〜申す事あり、申聞けたい事がある。

大市民 コレ〜静にせい、アントニー様の御詞を承れ。

ニアント いかに入々、汝等は無我夢中の舉動を致さるゝ、抑も何の廉を以て汝等さばかりシーザル公を御慕ひ申すぞ、あゝ汝等は自ら承知致さぬ、此上は某が語つて聞かさう、汝等には拙者が先刻申聞けたる、遺言の一條を早忘れ果てしな。

大市民 いかにもさうぢや、先づ〜此處で遺言を聞いて往かう。

ニアント シーザル公御自筆の遺言状は即ち此處に——(と書附を讀みながら)羅馬の市民全體へ、一人毎に七十五「ドラクマス」の貨幣を遺物として遺すべしとある。(一ドラクマスは約九片に當るといふ)

乙市民 いや見上げた御心ではある、此復讐は我等が致す。

丙市民 おゝ有難いシーザル公。

ニアント 先づ静かに聴聞あれい。

大市民 静かに〜。

ニアント 此上に又シーザル公には、御所有のあらゆる莊園、別邸、其外新設の庭園等、タイパー河の此方にあるを、悉く汝等に譲り、永世子孫に傳へしめ、長く遊覽娛樂の場となさしむるとある——あゝシーザル公は既に亡き人の數に入り給へり、何時の世にか又羅馬に、此の如き偉人あらむ。

甲市民 いや〜此様な偉人が又とあるものか、ヤイ〜皆の衆、シーザル公の御屍骸を禮堂(公會堂内にある)で焼いた上、其燃燼(もみ)で叛人等が家々を焼



さ拂へ、サア、御屍骸を擔げく。

乙市民 誰ぞ火種を持つて來い。

丙市民 腰掛共を打碎け。

丁市民 腰掛でも窓框でも、何でもかでも引摺出せ。

と市民大勢屍骸を擔ぎ退場

ニアント いや藥は大分廻つたやうぢやな、これでどうやら騒動の種を蒔付けた、萌え出る末が待たるゝ事ではある。

オクタピスの近侍登場

ヤア其方か、様子は何と。

近侍 オクタピアス様には、既に羅馬へ御着きなされました。

ニアント して御宿は何處ぢや。

近侍 レビダス様と御兩人にて、シーザー公の御館へと御越なされました。

ニアント 然らば拙者も、早速參上致し御意を得やう、願うたり叶うたり御入來運の神は我等に笑顔を見せさせらるゝ、此模様では、何ぞ我等に善い物を取らせらるゝ事であらう。

近侍 道々噂を聞きますれば、ブルータス、カツシアスの兩人には、狂人の様になつて、羅馬の城門を騎り抜けたの事でムります。

ニアント 定めて彼等とても、拙者が詞故に、人民の心動かし由を薄々聞かれしならむ——いざ、オクタピアス殿の許へ、業内致せ。

と兩人退場



第三場——全前 街上

詩人 シンナ登場

ナシ  
シーザー公の招宴に列ると見し昨夜の夢、凶事の兆かと氣遣はれ、胸騒ぎせらるゝ事ではある(響應の席に列する夢は悪夢)かう外面を徘徊致さむ心とてもなけれども、何とやら我を導ずくものあつて、此様に徘徊致す。

市民大勢登場

甲市民 ヤア、其方は何と申す者ぢや。  
乙市民 其方は何處へ參る。  
丙市民 其方の宅は何處ぢや。

丁市民 女房持か獨身者か。  
乙市民 各の間にさつさと返答致し居れ。  
甲市民 手短かに申すが宜い。  
丁市民 そして手賢く申すが宜い。  
丙市民 そして有の儘に申すが宜いぞ。  
ナシ 身共は何と申す者ぢや、何處へ參る、宿は何處、女房持か、獨身者か、そして各の間に、さつさと手短かに、手賢く、有の儘に答へよと云はるゝか、さらば先づ申さう手賢く、身共は獨身者ぢや。  
乙市民 何と申す、獨身者が手賢い、女房持は薄鈍ぢやと申す云分ぢやな、一つ擲されぬ用心せい、先づさつさと後を申せ。  
ナシ さつさと申せば、身共はシーザー公の葬式へ參る者。





【いこて持なしえ燃アサアサ—せ殺せ殺】

甲市民 それは心より御いたはしく思うてか、但

しは心ならずもか。

ナシ 御悼しう思うてぢや。

乙市民 それでこそさつさと埒が明いた。

丁市民 宿は何處ぢや手短かに申せ。

ナシ 手短かに申せば身共が宿はカビトルの

傍ぢや。

丙市民 名は何と申す、有の儘に申せ。

ナシ 有の儘に申せば名はシンナと申す。

甲市民 イヤ八つ裂に裂いて仕舞へ、此奴は逆徒

の一人ぢや。

ナシ 身共は詩人のシンナぢや、詩人シンナぢやぞや。

丁市民 イヤ裂いて仕舞へ、日頃悪詩を作る奴、悪詩の報いぢや裂いて仕舞

へ。

ナシ 身共は叛人のシンナぢや、ではないぞ。

乙市民 構ふ事はない、名がシンナぢや、其名を胸からもぎ取つたなら、放し

てやれ。

丙市民 殺せ——サア——燃えさしを持つて来い、ブルータスの家へ

往けカツシアスの家へ往け、何れも此れも焼け、デシアスの家へ

も往け、カスカの家へも往け、リガリアスの家へも往け、サア——皆往

け。

と一同退場



### 第四幕

譯者曰く、第三幕と第四幕との間には約十八ヶ月の経過あり、此間にアルータスとカッシアスとは人民の反抗に居堪まれず僅に身を以て羅馬を落ち延び、前者は希臘のマセドニアに、後者は小亞細亞に遁れて、各其同志を糾合し兵を集むること數月の後、二人又相合して羅馬に攻上るの計畫あり、又羅馬に於てはシーザー死後アントニー、オクタヴィアス、シーザー及びレピダス三人勢權を得て所謂三執政と稱し、羅馬國を三分して各其一を保ち、帝王の如き權力を振ひしが、アルータス等兵を合せ攻上るの風説を聞き、將さ之に對するの準備を爲さむとす、第四幕は恰も此時機を以て始まるものと假定して一讀あらむことを望む

### 第一場——羅馬——アントニー家の一室

アントニー、オクタヴィアス及びレピダスの三人卓を圍みて座し居る



なげずれ入に中の數も兄舍御の殿貴殿スタビレ  
しなうらムて知承御いますまり

ニアント 然らばこれだけ

の人員を、死罪に行ひ  
申すてムらう、姓名へ  
一々黒點をつけまし  
たぞ。

ピオ  
アク  
スタ  
レ  
ピ  
ダ  
ス  
殿  
貴  
殿

の御舎兄も數の中に  
入れずばなりませ  
い、御承知てムらうな。  
タレ  
スピ 如何にも承知は致  
しました——。



ピオクスタ アントニー殿、點を御つけなされ。

タレスピ 但しマーク・アントニー殿、貴殿が甥御のバプリアスも、生けては置かぬと申す、御約束が承りたい。

ニアント いかにも、彼奴も生けては置きませぬ、御覽あれ此の如く點をつけます。時にレビダス殿、貴殿はこれより、故シーザー公の御館へ参られ、御遺言書を此處へ御持参あれ、御遺産分配の額も、切詰められうだけ、切詰めるやう熟と詮議致さう。

ダレスピ して御兩所には、此處にて御待ち下さるか。

ピオクスタ いかにも此處にて、さなくばカピトルにて御待ち申さう。

とレビダス退場

ニアント いや碌々たる小人とは、彼が事、走り使ひが身分相應、天下を三分

して、其一を保つの器ではムらぬ。

ピオクスタ ハテ貴殿は、彼を其器と思召せばこそ、死罪に處すべき誰彼の詮義に就き、彼が意見を、もわざ／＼御聴きなされたではムらぬか。

ニアント いやオクタビアス、かう見えても某は、貴殿よりも、少々長らく浮世の鹽を嘗めましたぞ、我等が此度の大計畫、稍もすれば世間の疑惑を惹くの恐あり、其疑惑、讒謗の、重荷を背負はせう爲めにこそ、此様な司位をも許して置け、誠は金銀の荷を積む驢馬も同然、我等が差圖で追立て、驅り立て、汗水垂らして動めけども、我等が實物を、目的の地に運びし上は、積荷を下して放つばかり、放たれた驢馬が耳を振ひ、野の青草を漁りに行く、それを即ち彼が身上。

ピオクスタ それは貴殿の御隨意なれど、さればとて、彼は至つて勇敢無雙の



軍師でムる。

ニアント げに、オクタビアス、某が乗馬なども其通りでムる、夫故にこそ某は乗馬に飼料を惜みませぬ、又日頃は戦場の駈引、一進一退の足取を訓練致し、彼が肉體の運動は、某が精神次第で、如何やうにも相成るやうに仕込みます。レビダスとても何うやら似寄つた所がムる、即ち能く教へ能く練り、能く指圖を致さねば役には立ちますまい——とかく精神の足らはぬ男で、何事も他人の爲し來り、爲し陳した物眞似を致して、得々と構へ居ります。所詮我等が道具と御心得あれ——それはさて置きオクタビアス殿、一大事がムる御聞きあれ、ブルータス、カッシアスの兩人には、頻りに軍勢を集め居るげにムれば、我等も急ぎ勢揃を致さねばなりません、就きては我等が盟約を鞏固に致し、

確かなる味方を作り、あらゆる方略を案ぜねばなりません、されば少しも早う評定の席を開き、我等に對し密かに陰謀を抱く族を見現さむ最上の手段は如何に、既に現れたる危難には、如何様に當るを確實と致すべきか、其邊熟と評定致さむ。

ピオアグスタ いかにも左様致すでムらう、今ぞ我等が盛衰興亡の岐れ路、隙を視ふ敵共は、四邊りに充つる今日此頃、表に笑顔を粧ふ者も、裏に異心を挿み居るは、珍しからぬ事てムる。

と退場

第二場——サルデス(小亞細亞なるヤニア國の舊都)附近の陣營

ブルータスが陳屋の前



軍鼓の響、アルーダス、ルシリアス、チ、ニアス及び兵士大勢登場、他方よりヒンダラス(カツシアスが僕)登場一同の前に来る、又少し隔りたる所にルーシアス登場

タアスルー 停れッ。

アルスシリ 停れッ、合詞を申せ。

タアスルー いやルシリアス、カツシアスは當方へ参らるゝか。

アルスシリ いかにも當方へ参られます、即ちこれなる従僕ヒンダラスは、

主人カツシアスの使者として、伺候致した者でムりませう。

とヒンダラス一書をアルーダスに呈する

タアスルー それでこそ満足致す——こりや、ヒンダラス、其方の主人はな、我から變心致したか、又は悪人の誣言に迷はされたか、兎角拙者に對し、

不安の念を懐かする如き、舉動を致された、乍去當方へ参るとある上は、やがて委細の事情も判明致すであらう。

ラヒスダ 餘人は知らず主人カツシアスに限つては、清廉潔白の御身の上と、必ず御判明遊ばすでムりませう。

タアスルー いかにもさうなうては叫はぬ筈。

とヒンダラス退場

ルシリアス、一言問ふ事がある、カツシアスには足下に對し、如何やらの待遇を致された、語つて聞かされい。

アルスシリ 某は至つて鄭重なる禮遇に預りまして、乍去、以前の如き隔なき取りなし、奥底なき語らひは、致されぬやうで、ムる。

タアスルー それぞ正しく、情誼の冷めゆくなべての筋道、心して見られよ、ル



シリアス、情愛の衰へ初むる時、人は力めて禮節を用ふるもので、  
露雜り氣なき友誼には、禮義作法の小細工も不要なれど、友誼は衰へ  
て、心既に虚なる者は、轡に手を懸け曳かるゝ時のみ、勇みを見する乗  
馬同然、逞ましき様子を粧ひ、元氣に満つる見得を作れど、いざ戰場と  
いへる時、鞭拍車にて責め立つれば、忽ち頂を垂れ倉浪と、倒れて再び  
用を爲さず、日頃の重望に背くが習ひ——(此時喇叭の遠音聞ゆる) ヤ、カッシア  
スの軍勢が参ると見ゆるな。

アルシリ いかにも今夜は、此サルヂスに宿泊なさむ思案の由にて、部下の  
大部分騎兵を擧つて、御出あるとの事である。

と喇叭の音近より来る

タブスル 聞かれよ、早や來着致された、徐ろに参つて對面致さう。

アカツシ (舞臺の外にて) 停れつ。

とカッシアス兵士大勢登場

タブスル 1 停れつ、合詞を申せ。

甲兵士 停れ。

乙兵士 停れ。

丙兵士 停れ。

アカツシ 賢明なる老兄には、ようも——某を御侮辱なされましたな。

タブスル 神明も照覽あれ、敵をさへ侮辱などは致さぬ某、況して同盟の賢  
弟を侮辱致すべきか。

アカツシ ヤア、ブルータス、其嚴肅な眼色の中に、禍心を藏する貴殿が陰險、

其上——(と激しい聲、高にいふ)



タアルー 静かになされカッシアス、不満の筋あらば、手柔かに申されい——  
いや貴殿の心中はよう承知致す、此兩軍勢の面前にて、我等二人が争論の有様は見せともムらぬ、たゞ／＼和親の俣が見せたるムる、先づ御軍勢を遠ざけて、某が陣幕の中に御入りなされ、さて其上にて、御不満の筋あらば、残りなく仰せられい、静かに聴問致すてムらう。  
アカッ シ 然らばビンダラス、汝は隊長共の許に参り、兵士を少しく彼方へ遠ざくるやう命じて参れ。

タアルー ルーシアス、其方も同様に取計らへ。又我等が談合を終る迄、陣幕の邊りは、固く人拂ひに致し置け。ルシリアス、チ、ニアスの兩人へは、大儀ながら警固を頼みましたぞ。

と一同退場

### 第三場——全上——アルータスが陣幕の中

アルータス及びカッシアス登場

アカッ シ 老兄には某を侮辱なされしと申すは、此一事に依つて明かてムる、即ち貴殿に於ては、彼のルーシアス・ペラなる者が、此國なるサルヂス人より、賄賂を受けしとの廉を以て、嚴罰を彼に加へ、軍中に御徇へなされた、然るに其儀に就き、某は前以て彼を承知致せし故、彼が爲めに辨解の書面を認め、御手許に差出せしに、熟讀も遊ばされず——  
タアルー いや彼の様な折に、彼の様な御書面を御遣しあるとは、貴殿自ら辱しむると申すもの。

アカッ シ いや只今如き騒亂の時勢に、取るにも足らぬ細瑾を、一々詮議立



は迂濶千萬の汰沙でムる。

タプ  
スル 御聞きあれカツシアス殿、さいふ貴殿御自身も、餘り金銭に慾を  
渴き、司位を金銭で、下賤の輩に御賣りなさるとは、さて、申様もな  
い次第でムる。

アカ  
スツシ 何、某が金銭に慾を渴く(半分抜く)、お、これがブルータス殿の御  
口より出づればこそ、若し他人なら手は見せまい。

タプ  
スル いやさ、かやうなさもしき舉動も、カツシアスといふ名にめて、  
こそ、責罰の鞭も暫く影を潜むるなれ。

アカ  
スツシ 何、責罰ぢやと。

タプ  
スル 一 ヤイ三月望の日を忘れたか、大ジュリアスを殺害なせしも、正義  
の爲めにはあらざるか、よも我等徒黨の中に、正義の爲めならて、彼が

現身に刃を觸れし者はあるまじ、何ぞや、世界第一の偉人シーザーを、  
國家を蠱毒する盜賊の巨魁なりとて、誅戮なしたる我等の中に――  
今其我等が、今更汚らばしい賄賂を以て、清淨なる指を汚し、我等が世  
にも希なる大名譽を惜氣もなく、一攫の金銀に賣らるべきか、某など  
は、左様な羅馬人で生存へうより、寧ろ狗になつて、月影に吠ゆるが望  
みてムる。

アカ  
スツシ いや其様に御吠えなされな、勘忍の緒が切れ兼ねぬ、餘り御差圖  
立が過ぎまするぞ、憚りながら、此某は一軍の將としては、貴殿よりも  
永らく職にあり、部下の引廻し使ひ道にはたけてムる。

タプ  
スル 一 愚か、足下は其様な器ではなし。

アカ  
スツシ いや其器でムる。



タブスル　いや／＼断じて其器にあらず。

アカスツシ　え、黙りめされ、某とて何時迄も、勘忍は致されぬ、命が惜くば、此

上とやかう仰せらるゝな。

タブスル　止めよ、迂愚者。

アカスツシ　ちえ、何たる暴慢。

タブスル　コリヤ聞けカツシアス、申聞ける事がある。

とカツシアス怒りの顔、色凄しく、何事か云はむとするが如き様子にて詰め懸くる

ヤイいかに足下が怒ればとて、此まゝにして止むべきか、狂人に睨ま

れて、恐れ戦く某ならず。

アカスツシ　お、神々(と心亂るゝが如く彼方此方を歩み廻りながら)かく迄罵られ、それでも勘忍致

さずば叶はぬか。

タブスル　かく迄とや、いやまだ／＼此上申さぬばならぬ、足下の高慢な胸が、破れ裂ける迄悶えうとまゝ、乍去其怒りの顔色は、御自分の家來に見せて、堪能する程恐れ顔かしむるが宜い、此某が足下の怒りに避易し、只管足下の眼色を覗ひ、足下の一喝に容易く跼まる弱武者と思はるゝか、(とカツシアス歩を留め)いやさ立腹の御馳走は、拙者堅く御辭退致せば、足下自ら腹の皮の、裂け果てる迄飽食して、我から後に思ひ當るが上分別、此後足下怒り狂はゞ、此某は善い慰みと見物致し、物笑ひの種と致さう。

アカスツシ　ちえ、これ程迄――。

タブスル　足下自ら某などより老功の軍將と仰せられた、其高言空しから



ず、天晴の將軍とならせられなば、某とても満足致す、某なども、以來は  
高德の君子を師範と致し、一層稽古を勵むてムらう。

アカツシ (静か) 何につけても貴公には、某を曲解なさるゝ、某は貴公より  
も、永らく職務に携はれりところ申したれ、貴公よりも老功とは申さ  
ぬ心得、果して老功と申されましたか。

タプスル 1 よしや申されたりとも、別段氣にも留めは致さぬ。

アカツシ 想へば故シ、ザ、存生中と雖も、かばかり某を嘲弄は致されぬ。

タプスル 1 黙らしやれ、故シ、ザ、に對しては、一言の詞を返す事だにえう  
せぬ足下が。

アカツシ 此某がえうせぬ。

タプスル 1 いかにも。

アカツシ え、何と云はるゝ、一言の返言をもえうせぬと。

タプスル 1 命が惜しさにえうせられぬ。

アカツシ (怒ながら制) 某が從來の好誼に、餘り御甘へなさるゝな、後日口惜  
しう思ふ事でも、爲し兼ねる某ではムらぬ。

タプスル 1 後に口惜しう思ふべき事の數々は、既に足下爲されし筈、いやさ  
其様な嚇し文句に恐れは致さぬ、正廉の鎧を身に纏ふ某には、空吹く  
風と氣にも留めぬ、軍用金の調達を、足下許頼み遣はせしに、足下はそ  
れを拒まれた——畢竟某は不正の手段をもて、一錢をも集るの道を  
知らねばこそ、嗚乎不正の手段を用ひ、農民の膏血を絞らむよりは、寧  
ろ我胸をかつさばき、血の滴を錢に替へたきが某の望み——ともか  
くも兵士に給料を下さむ爲め、用金の調達を御依頼致せしに、足下は



そを拒まれた、これがカツシアスとも申さるゝ軍將の、某に對し爲さるべき所爲でムらうか、此某はカツシアスに向ひ、かりにもかやうな所爲は致さぬ所存、おゝ此マーカス・ブルータスが、取るにも足らぬ金錢を同盟の友に吝むが如き、鄙吝の徒となるならば、天神直ちに霹靂の火を降し、此身を微塵に粉碎かれむ法もあれ。

アカスツシ いや某は拒みは致さぬ。

タプスルー いや拒まれた。

アカスツシ いや拒みは致さぬ、大方某の口上を、御傳へ申せし使の者が、不行届故の御邪推と見えたり——ブルータス殿こそ、某を這々の躰に御逢はせなされた、相互の瑕瑾を見道し合ふが、朋友の情誼なるべきに、ブルータス殿には、却つて針小を棒大の御詮義立。

タプスルー いや其瑕瑾とても、某に御仕向けなくば、何の詮義立を致すもので。

アカスツシ 親友とは名ばかり、貴殿は某を御愛し下さらぬ。

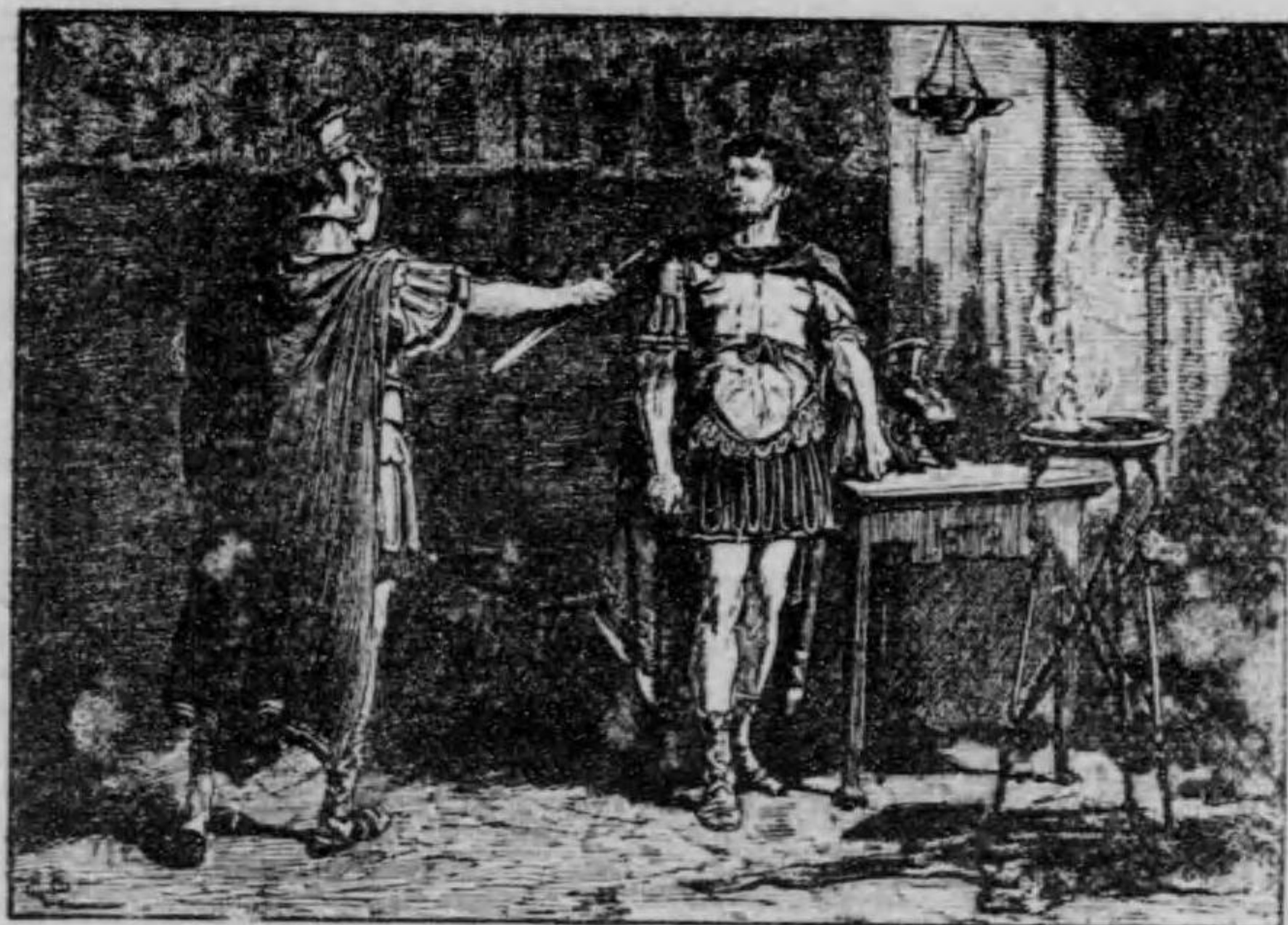
タプスルー 某とても足下の瑕瑾は愛しませぬ。

アカスツシ 友愛の眼には、さやうな瑕瑾も映らぬ等。

タプスルー 阿諛諂佞の眼には、オリンパスの山程大きく見ゆるものも、見て見ぬ振を致すもの。

アカスツシ え、早うアントニー、オクダバアス等に迫られて、此身一人が殺されたい、カツシアスは、つく／＼浮世に倦み果てた、我が慕ふ友に憎まれ、兄と頼む人に棄てられ、下郎同然に耻しめられ、あらゆる瑕瑾は、託き立てられ、覚え帳に記し留められ、調べ上げられ、諳んぜられて、我





「これ、貴御……」

「某が胸に當りて」

が眼前に讀上げらるゝを見る  
つらさ。おゝ某が精神を此の兩  
眼より泣き潰す法もがな——  
御覽あれ、こゝに某の短刀が  
（を）拂ひて、こゝに甲も當て  
ぬ胸がムる、此中にこそ、富神ア  
ルトーが金山よりもいや貴く、  
黄金銀にも優りて、いや貴き心  
臓がムる、貴殿も羅馬の士とあ  
る上は、早々之を御取りあれい、  
貴殿に用金を拒みし某、此心臓

を進ませせう。いで、曩日シーザーを討ちしが如く、此某を御討ち  
あれい、ハテ貴殿には、故シーザーを尤も惡みし時と雖も、某を御思ひ  
下さる、其淺き友情に比ぶれば、遙かに大なる追慕の情を、御寄せな  
れたてはムらぬか。

「アス」 いや其拔刀は御藏めあれ、此上は隨意に怒りを御漏らしなされ、  
さらば御胸もすくてムらう、又何とても隨意の舉動をなされませい、  
何の様な御舉動でも、只だ一時の出來心と、此某は見違がし申さむ、お  
ゝカツシアス、彼の燧石を御覽あれ、激しく打てば閃電眼を突き進れ  
ども、忽ちにして又素の冷靜に還るが如く、小羊同然の此某も、激すれ  
ば即ち怒ると雖も、忽ち和らげば痕も留めぬ男でムる。

「アカス」 さて、此カツシアスは、天成の執拗なる氣質故に、思ひ亂れか



き亂るゝ其間、たゞ／＼ブルターヌ殿が笑ひの種慰みの種とならむが爲めに、これまで生存へ來りしか。

スタル　いや某が只今申せしことも、同じく執拗なる氣質故の、只一時の過言でムつた。

アカツシ　何と仰せらるゝ、それが貴殿の真情でムるか、あゝ嬉しや、然らば御手を下されい。(憐和の上握手)

スタル　(カツシを抱)此胸までも進ませせう。

アカツシ　あゝブルターヌ老兄――。

スタル　何事でムる。

アカツシ　外でもムらぬ、此某が愚母より傳へ受し多血なる氣性故、覺えず我を忘るゝ時にも、尙ほ御勘忍下されう程、此後とも何卒某を御愛し

下されい。

スタル　いかにも御愛し申さむ、以來は貴殿が此ブルターヌに對し、粗暴の舉動を致さるゝ時には、貴殿の母御が、口小言を仰せらるゝと觀念致し、決して心には留めませう。

と此時奥にて騒がしき人聲聞ゆる

詩人　(奥に)大將達に用事がムる、御通し下され、どうやら御不和の摸様でムる、打棄て置くは宜しうムらぬ。

アルシリ　(奥に)いや／＼通す事は相成らぬ。

詩人　(奥に)死すとも通らずには居らぬ／＼。

と詩人後よりリルシリアス及びチ、ニアス登場

アカツシ　ヤア／＼何事なるぞ。



詩人 御耻辱でムる兩大將、如何なる思召でムる、御構和あれ兩大將、これ程の兩雄が並び立たれぬは國家の不利、ハテ御兩所などよりも浮世の風に永らく吹かれた此某。

アカツシ ハ、アぬらくらと又しても狂言綺語を並べ立つるか、

タスル ヤア出て失せい無禮奴。

アカツシ 御勘忍なされブルタース殿、これが此奴の癖でムる。

タスル 癖はいかにも承知なれど、時ならぬ癖は勘忍ならぬ、かやうな愚物が、戰場に何の用をか爲すべき、痴者失せい。

アカツシ 往ねく、行きやれつ。

と詩人退場

タスル ルシリアス、チ、ニアスの兩人には、隊長に中附け、今夜は此處に



【せ致器持を酒は方其スアシール】



一宿の準備を致させよ。

アカツシ して足下等是用濟次第、メツサラを伴ひ歸り來られよ。

とルシリアス及びチ、ニアス退場

タブスル ー ルーシアス其方は酒を持參致せ。

とルーシアス退場

アカツシ いや某は老兄が、彼の様に御立腹あらむとは思ひも懸けぬ事て  
ムりました。

タブスル ー おゝカツシアス、御免あれ某は様々の憂愁に責められて、日頃の  
やうにもムらぬ。

アカツシ 區々たる一時の不如意より、憂愁に陥らせ給ふとは、日頃の御悟  
道も餘り御役には立たぬと見えませす。

タブスル ー いや憂愁を忍ぶに於ては、乍不肖ブルータス、何人にも劣りは致  
さぬ——御聞下され、ポーシアが死亡なりました。

アカツシ 何とてムる、ポーシア殿が。

タブスル ー いかにも彼女かれが亡なりました。

アカツシ ちえ、それとも知らず先刻さいの暴言、御手に懸つて御刀の露と消  
えざりしは不思議の幸福しちほ、おゝ堪へ難き御愁傷御察し申し上げます  
る——して如何なる御病氣にて。

タブスル ー 一つには某が不在を憂ひ、又一つには、オクタビアス、マークアン  
トニー等の勢力漸う強大なるを見——これは彼女かれが訃音と共に落  
手致したる消息に依つて明白でムる——夫故遂に亂心致し、侍女共  
の隙を覗ひ、炭火を口に銜みしとの事でムる。



カスツシ してそれ故御死亡なされましたか。

アスル 左様でゐる。

カスツシ おゝ嘆かばしい事でゐる。

ルシーシアス 酒瓶と及び蠟燭を携へ登場

アスル 此話題は何卒最早御止め下され——いざ一盞傾けませう——

と酒盞を取上げながら

カスツシアス 殿、此一盞に、此迄の不和を葬りまするぞ。

と飲干す

カスツシ 某も是非く一盞所望致す——いでルシーシアス、山盛りに注いで呉りやれ、ブルータス公が、友誼を祈る訂盟の盞、いか程頂戴致しても、過すと申す事はムらぬ筈。

と飲干す、ルシーシアス退場

チ、ニアス、メツサラを伴ひ登場

アスル 近う参られよチ、ニアス——メツサラ善うこそ御出やつた——

さらば一同燈火の周圍に打寄り、大事を評議致すであらう。

とメツサラ、チ、ニアス着席する

カスツシ (旁) さてくボーシア殿には、御遠逝なされたか。

アスル 最早其噂は、何卒お止め下されい。

とアスル、メツサラ、カスツシアス兩人卓に向ひ着席

さてメツサラ、本國よりの消息に、オクタビアス、マーク・アントニーの兩人には、我等を追討の爲めと稱し、大軍を率ゐ、ヒ非リツピ(マセドニ名)指して早や進向致せしとある。



サメラツ 某へもさる方より同様の消息がムりました。

スタル して其外には、どのやうな通信たよりを受けられた。

サメラツ 其外には、オクタビアス、アントニ、レビダスの三人にて、嚴法酷刑を設け、一百人の議事員を誅戮致せし赴の通信がムりました。

スタル 其儀に就きて某への通信は、少々相違がムる、即ち殺害せられし議事員は七十人、シセロも其中にありとの事てムる。

アカツシ シセロ公も其中に。

サメラツ いかにもシセロ殿も同じ嚴法に依て、殺害致されましたげにムりまする——して其御通信は夫人おがたよりの御手紙てみてムりましたか。

スタル いや左様ではムらぬ。

サメラツ 然らば其御通信の中に、夫人の御噂はムりませぬか。

スタル 少しもムらぬ。

サメラツ ハテそれは不思議な事てムる。

スタル 何故其様なことを問はせらるゝな、足下への通信には、何ぞ彼女おがたの噂がムるか。

サメラツ いやムりませぬ。

スタル いや足下も羅馬の士なりや、有の儘に申されい。

サメラツ よんどころ據ムらぬ、然らば某が申上ぐる所を、尊公にも羅馬の士らしく、忍んで御聞なされ、何を隠さう夫人には、不思議の御最期を御遂げなされました。

スタル さてはポーシア、迷はずに彼世へ往け(と一同起)死ぬに極まる人の命、我等とても一度は死ぬる命と思へば、彼女おがたが死亡も諦め易い事



てムる。

サメ

偉人大難に當るの覺悟は、正さに此くあるべきでムりませう。

アカ

某なども理に於ては、正さに然るべしと存じながら、いざとなれば、實踐躬行は成り兼ねます。

アカ

スツ

タブ

いや死人はさて置き生ける我等が此の後の、取るべき途に就き、

タブ

熟と協議が悍要でムる——それに就きいまより直ちにヒキリツピ

(希臘のマセドニアに在る地名、此時アントニオへ、進軍の儀は如何でムる。)

アカ

スツ 其儀は某當を得たる計謀とは思ひませぬ。

タブ

スツ して其理由は、

アカ

スツ 理由と申すは外でもムらぬ、敵をして我に來らしむれば、力を費

し、兵を疲らし、莫大の損失を蒙らしめつゝ、我は靜かに兵力を休養し、防備を嚴にし、逸を以て勞を討つの大利がムる。

タブ

スツ 但し如何なる理由と雖も、それに上越す理由がムらば、棄てねば

ならぬが軍略でムる、御聞あれ抑もヒキリツピの彼方より、此地に至る間の住民は、いや／＼ながら、我が軍令に従へども、とかく部備徵發を厭ひ恐るゝ様子、敵軍此地に進むの途上、彼等の間を通過致さば必ず壯丁は馳せ加り、糧食を献じ、用金を捧げ、敵をして勇氣更に一倍せしめむ、然りと雖も、我若し速にフキリツピの地に進み、此等住民を背にして戦ふならば、敵をして此大利に浴することを得ざらしむるは明なり。

アカ

スツ いや御聞下され老兄。



タブル 先づ、某の詞を御聞下され——其上我等は、只今が味方の全力を舉りたる、頂上なるを御含みあれ、我が兵力は充實し、我が戦機は熟したるに、敵はこれより、日に、軍勢を増しつゝあり、時に立つ我等が勢は、只だ下り路に向ふばかり、夫れ人事には干満の潮あり、満潮に乗ずれば、忽ち幸運の港に到るべく、若し又此機を失はば、我等生涯の船路の旅は、難船破船の憂目に終るてムらう、我等只今かゝる潮の上に漂ふなれば、此潮時が悍要でムる、さらば大事は去りませうぞ。

アカツシ 此上は御説の通りになされませい、早速我軍を進め、ヒヰリツビの地にて、一戦致すてムらう。

タブル 評議にいつしか時を移し、早や夜もいたう深けてムる、神ならぬ血肉の身は、暫しなりともまどろまずばなりません、最早申すこと

はムらぬか。

アカツシ ムりませぬ、さらばこれより御眠みあれ、明日は早朝寢床を出て、それより出立致すてムらう。

タブル ルーシヤス、身共の寢衣を持つて参れ——(とルシヤ退場)メツサラ、さらば——チ、ニアス、さらば——床し床しのカツシヤス、さらば——御眠みあれ。

アカツシ お、懐かしの老兄(とブルイダスを抱きながら)今宵は誠に心にもあらぬ喧嘩口論、御容赦下され、今後は再びかやうな邪心は抱きませぬ、何卒老兄にも。

ルーシヤス 寢衣を携へ登場

タブル 其氣遣は無用でムる。



アカツシ　さらば御寝なされませう。

タプスル　御眠みあれ賢弟。

メチツ、サニラス　御寝なされませブルータス公。

タプスル　何れもさらば――

とカツシアス、チ、ニアス、メツサラ退場

ルーシアス寝衣を此方へ――さて其方が琴は何れにあるな。

アルス　此天幕の内にムりまする(氣にも眠た)

と琴を取りに行き直ちに携へ還る

タプスル　ても其方は眠さうな口のきゝやう、乍去思へばそれも道理く、連夜の疲勞が出たのであらう、クラウチアス、及び其外誰ぞ一人、身共が召使の僕を呼寄せい、今夜は此天幕内に眠ますると致さう。

アルス　ヤイ、ワローにクラウチアス、御前の御召ぢやぞや。

とワロー及びクラウチアス登場

ワロー　召しましたか御前。

タプスル　おゝ其方共、今夜は此處に眠んで呉りやれ、後刻カツシアス殿への用向にて、其方共を喚び起すやも測られねば、

ワロー　いや眠む迄もムりませぬ、此まゝ御用向を御待ち申すてムりませう。

タプスル　いや其まゝ待ち居るには及ばぬ、眠むが宜いぞ、用向とても、中止致すやも測られぬ――ルーシアス、見やれ、先刻尋ねた書物がここに在る身共がいつか寝衣の衣囊へ入れ置いたと見える。

と二人の僕は横臥し眠りに就く



アルス！ シ さればこそ、私が御預り申した覚えはムリませなんだ

タブスル！ 許して呉りやれ、身共は物忘れを致してならぬ、さて其方は大儀ながら、暫く忍んで、一曲二曲、絃の音を聞かせて呉りやらぬか。

アルス！ シ 畏りました、御意にさへ叶ひますれば。

タブスル！ 其方が絃の音は、いつとても身共が意に叶はぬ事はない、いや、硬ひ立て、氣の毒なれど、其方が忠實しき奉公振嬉しいぞよ。

アルシ！ それが私の義務でムりまする。

タブスル！ とは申せ、其方の身に應ぜぬ義務を、申付けるは身共の誤り、若き者の眠りを貪るは承知の身共。

アルス！ シ 私は最早眠りましてムりまする。

タブスル！ 宜うこそ、乍去此上又眠むが宜い、長くは引留めぬぞ、あゝ此

後とも、身共若し世に生存へなば、必ず其方の力になつて遣はずぞよ

とルーシアス 座して琴を弾じ始むる、但し間もなく琴を抱きしまゝ眠り入る

いや、これは眠たい調子ぢや——お、睡魔奴が、重い、鉛の棒を、絃を弄ぶ小童が、頭の上に載せたに見える——此上は呼び覺して罪は作らぬ、乍去此儘棄て置かば、頭の上下にて、琴を破るであらう、いて琴を取つて遣はさう。

とルーシアスの手より琴を取りて下に置く

これで宜い、ゆるりと眠め——さて何と致さう——あゝ、此書物は読みさしの紙面が折返してはあらぬか、ウム、此處であらう。





「……者何はるなれそやや……」

と腰を下す  
時にシーザーの幽霊現れ  
出る

ハテ此燈火の次第に暗く  
なり行くは——やゝそれ  
なるは何者、さては我が眼  
の疲れにて、かゝる怪異も  
見ゆるなるか。

と幽霊次第に近寄り來  
る

フム次第に此方へ近寄り

參る——さては我眼の迷ではないか、神か天使か抑も魔か、我が血脉  
を冷やかならしめ、我が毛髪を逆立たしむる不思議さよ——何物な  
るぞ語つて聞かせよ。

靈 我こそは汝に仇なす魔。

タプスル 何故此處へは現はれしぞ。

靈 フキリツビの原頭にて、汝と相見むことを告げむが爲め。

タプスル 然らば重ねて再會を期せむとな。

靈 いかにもヒキリツビの戰場にて。

と幽霊消失する

タプスル よし、さらばヒキリツビの地にて、重ねて汝に見參致さむ——  
え、勇を鼓して奮ひ起たむとすれば、いつの間にもやら消え失せしな、



何、我に仇なす魔性の者とか、よし我汝と語りたき事あり——誰かある、ルーシアス——ワロ、クロ、デアス、何れも起きよ——

クロ、デアス。

アル、シ 御前様、絃の調子が弛みましてムリまする。

タ、ス、ル、ハ、ア、まだ琴を弾き居る心意ぢやな——ヤイ、ルーシアス目を

覺せ。

アル、シ (前に進み出で) 何御用でムリまする。

タ、ス、ル、ルーシアス、其方は今夢中に聲を立てたが、何の夢を見やつたぞ。

アル、シ 私は聲を立てた覚えはムリませぬ。

タ、ス、ル、いや聲を立て居つたが、何ぞ其方の目に見えた物はないか。

アル、シ 何も見えた物はムリませぬ。

タ、ス、ル、 然らば又ゆるりと眠め——ヤア、クロ、デアス——目を覺ませ

ワ、ロ、

タ、ロ、 御召なされましたか御前。

タ、ク、ア、ロ、 何御用でムリまする。

と兩人起上り進み出る

タ、ア、ス、ル、 外でもない、其方共は何故只今夢中に聲を立てた。

ラ、ロ、グ、 さては聲を立てましたか。

タ、ア、ス、ル、 いかにも聲を立てた、何ぞ目に見えたか。

タ、ロ、 いや何も見た覚えはムリませぬ。

タ、ク、ア、ロ、 私とても見た覚えはムリませぬ。

タ、ス、ル、 さらば宜い、其方共は今よりカツシアスの陣屋へ赴き、一足先へ



御軍勢を御繰出しなされ、然らば我等も續いて出發致すと申して参

れ。  
ラウロゲク 畏まりました。ムリます。

と一同退場

### 第五幕

#### 第一場——ヒ井リツビの平原

オクタピアス、アントニー及び部下の軍勢登場

ピオ  
アスタ いか  
にアントニー殿御覽あれ、某が推察通りになつてムる、兼て  
貴殿の仰せには、敵は必ず丘陵嶮要の地に據り、此方に推寄せ來るこ



オクタピアス、アントニー及其軍勢

とは萬々あるまじとの事でムつた  
が、今や敵軍は間近に迫り我より推  
寄せ行くを待たず、此處ヒネリツビ  
の地を以て、戰場となさむ所存の程  
明白と相成つたり。

ニア  
ント いや敵の真意は某とくに洞見  
せり、眞實は此處に推寄せ來るは、素  
と彼等の本意にあらねど、内心の畏  
怖を外觀の勇氣に包み、兵を示して  
我等が心に、士氣大に奮ふが如く、思  
はしめむの計略でムる、中々以て眞



實左様の勇氣はムらぬ筈。

注進の使者登場

使者 大將達御用意く、敵は武威勇ましげに只今推寄せ参ります。また燃ゆるが如き猩々緋の陣羽織を、陣頭に高く推立てたるは、直様何ぞ致す所存と見えます。 (赤き目標を掲ぐるは、大決戦を意味すとぞ)

ニアント オクタピアス殿、此上は貴殿の軍勢を、此平野の左翼に徐ろに御進めなされい。

ピオクスタ いや某は右翼へ討つて出てませう、貴殿左翼へ御進みあれ。

ニアント ハテ今此大事の瀬戸に臨み、何故貴殿は某に抗はるゝ。

ピオクスタ 別に貴殿に抗ふ譯ではムらぬ、たゞ某はさやうに致す所存でムろ。

軍鼓の響にてアルータス、カツシアス及び其率うる軍勢其他ル

シリアス、チ、ニアス、メツサラ等登場

タアル 敵軍彼處に佇み居るは、さては我等と問答致したい冀望と見ゆるな。

アカツシ チ、ニアス殿、足下は此處に三軍を停めて御控へ下され、我等は

これより進み出で、敵と問答致すてムらう。

ピオクスタ マーク・アントニー殿、進撃の合圖を致しませうか

ニアント いやオクタピアス殿、敵の進撃を待つて、應戦致すも遅くはムら

ぬ——先づく前へ御進みあれ、敵將共には我等に對し物云ひたげの風情でムる。

ピオクスタ (軍隊に)合圖を致すまで停り居れ。

タアル いかに敵將に物申す、先づ干戈を交す前に、詞を交さむ所存なる



か。

ピオクスマ 但し我等は足下等如く、干戈よりも詞を好むが故にはあらず。

タプスル オクタピアス承れ、善き詞は悪き干戈に優れるものぞ。

ニアント いやブルータスに物申す、善巧方便の詞を以て悪逆の刃をいひ

くるむるとは足下が事、故シザーの御胸を刺しながら、ジュリアス公ばいばい萬藏と呼はつたを忘れはせまい。

アカツシ ヤア、アントニー、足下が腰の物の切れ味は、未だ世間に知られざ

れども、足下が口先にはハイブラシ、リ、島の産地として名高しの蜂共より貯藏の蜜を悉く奪ひ取つて、附けた程の甘味がムるな。

ニアント 其上刺をまで、奪ひ取つて附けは致さぬか。

タプスル！ いかにも蜂共が刺を奪ひ、其上又聲をまで奪ひ取つて、我物とせ

られし様子、さればこそ、足下は人を刺さむとするに臨み、先づブンくと鳴き廻つて、詞で嚇さるゝは、さて抜目のない事かな。

ニアント いや逆賊奴等、汝等の毒刃は、聲をも立てず不意打に、故シザー

を刺せしならずや、汝等は猿の如く齒を露はして笑を作り、狗の如く尾を掉つて媚を呈し、奴隷の如く腰を屈め、故公の足を嘗むる刹那、卑

怯にも後より忍び寄りたるカスカ奴が、初太刀に御頸を打ちしよな、え、汝犬共が。

アカツシ 犬共ぢやと——ちえ、ブルータス殿、かゝる耻辱を見るも、貴殿

の御説に従ひし故、愚案通りに致せしならば（即ちシザー殺害の當時ばら）かゝる無禮の言は吐かせまいに。

ピオクスマ 詞合戦無益々々、問答は汗の滴、勝敗は血の滴に依つて決すべし、



見られよ——某は逆賊共に對しかう拔劍致す、此劍の鞘に收まるは  
ハテ何時と思ふ——故シーザーが三十三の傷口の仇を返し了すま  
で、さらすは又一人のシーザーが(自からを指す)逆賊の刃故、返り討に合ふ迄  
は、いつかないかな納め難し。

タアスルー 聞かれよシーザー、足下が軍中に携ふる、逆賊の手に懸らば知ら  
ず、我等と雌雄を決せむ爲めに、逆賊の手に懸る憂はムらぬわ。

ピオクスタ いかにも左様な憂はムらぬ、ハテ此拙者は、ブルータス輩の刃に  
懸り、死ぬる爲めには生れて來ぬぞや。

タアスルー いやさ足下が如何なる槐門貴族の子弟なりとも、ブルータスの  
刃に懸り死ぬる程、名譽の最期は遂げられまいに。

アカスツシ 酒宴遊興に身を持崩す、放蕩者(アントニに指す)に語らはれた阿呆殿、二

才殿、いかで其様な名譽を受くる資格がムらう。

ニアント ヤア、カツシマス、まだ昔の大言が止まぬと見えるな。

ピオクスタ お止しなされアントニー殿——いかに逆賊共、此上は干戈を以  
て勝負を決せむ、今日戦ふの勇氣あらば、今より直ちに戰場へ出馬致  
せ、若し其勇氣なきに於ては、何時なりとも汝等が、随意の時に推寄せ  
來れ、相手を致し遣はさむ。

とオクスタピマス、アントニー及び其軍勢退場

アカスツシ いで此上は風も吹け浪も荒れよ、我が乗る船よ躊躇ふな、嵐は既  
に吹きそめたり生死の瀬戸際は今なるぞ。

タアスルー 喃々ルシリマス、足下に一言申す事がムる。

アルスシリ 何事でムる。



とアルーダス、ルシリ阿斯兩人一隅に離れて相語る

アカフツシ　メツサラ殿

サメラツ　何御用でムる大將

アカフツシ　聞かれよメツサラ、折しも今日は某が誕生日、今日の此日を以てカフシアスは此世に生れ出た、おメツサラ、改めて握手を許せ、後日の爲め足下に申置きたい事がムる、外でもない、某は心ならずも、一國の自由を、此一戦に賭するの、止むを得ざるに至りしもの、彼の大ボムベイが古へも坐ろに想ひ遣らるゝ事てムる、足下も兼て知らるゝ如く、元來某は、エビキュラスの學派（まがれ）を酌み、吉凶禍福の兆候などは、心にも留めざりしが、今は昔に變り何とやら、物の兆などに幾分此胸を騒がさるゝ心弱さ、此度サルデスより進軍の途上、陣頭に立てたる軍

旗の上に、大鷲二羽舞下りて又去らず、兵士が手より、食物を貪り食ひなど、馴々しく此のヒキリツビ迄伴ひ來りしが、今朝に至りて何れへか飛び去り行方知れず、後には鷲鳥群がり來りて、我軍陣の上を飛翔し、善き餌食（えじき）ござんなれと、云はぬばかりに見下せば、彼等が羽影はいつも恐ろしの天井にて、其下に打臥す我が軍は、やがて滅び失せなむ前兆にはあらざるかと、案ぜらるゝ事てムる。

サメラツ　左様な事がムりませうや。

アカフツシ　元より某とても、悉くは信じませぬ、いつも元氣は失せぬ某、如何なる難事にも、臆せず當る覺悟てムる。

アカスル　（ルシリ阿斯との談）其通りてムるぞ、ルシリ阿斯。

アカスツシ　さてブルータス殿、今日の戦争も、神助に依つて勝利を得、お互に



未長う、平和の月日を睦まじう、送りたきは山々なれど、測り難きは人事の常でムれば、逆じめ萬一の謀を語らひ置くが、肝要でムりませう。されば若し此度の戦争、我等が敗北に歸する時は、かく御面談を致すも、大方これが最後でムらう、愈よ其時貴殿に於ては、如何なさらう思召でムる。

タプ  
スル  
されば、天命に逆らひ自殺を遂げたる故カトローを、某難詰致せしことあるは、足下も御承知の通りでムる、同じ教理の表に依り(ストイック哲學)何とやら某は、將來を恐れ慮かるの餘り、人事を司る天命を待たむが爲め、殊更に忍辱(じんじやく)の力を養ひ、死期を測り、身後の計を爲すは、卑怯未練の舉動(よまごひ)と考へ申す。

アカ  
スツ  
シ  
然らば萬一、此戦争に敗北致さば、貴殿は捕虜となつて、羅馬の市

中を引廻はさるゝ御量見か。

タプ  
スル  
いや左様ではムらぬ、カツシアス(カウチアス)も此ブルータス、羅馬の辻に縛目の浮耻を暴さうとは思ひませぬ、しかすがに左様にさもしい心は持ちませぬ、乍去ともかくも、去る三月望の日に、我等が創めたる大業の終局を見るは今日の中、但し重ねて再會の期ありや否やは不明でムれば、只今此場に於て永訣の禮をかはし申さむ、いざさらばカツシアス殿、これが此世の訣別でムる、さらば――若し幸にして再會を得ば、ハテ其時は破顔微笑して相祝せむ、若し又其事なき時は、よくぞ交換(かへ)せし今日の永訣と、遺憾なく思ふでムらう。

アカ  
スツ  
シ  
さらば――ブルータス殿、いかにも重ねて再會の機を得ば、破顔微笑して相祝し申さむ、若し又其事なきときは、實(まこと)によくぞ交換(かへ)せし



今日の訣別、思ひ置く事もムるまい。

タプスル　ハテ然らばこれより出發あれい——おゝ人間の身を以て、今日の成行を、豫め知り得む法もがな、とは申せ、日は自つと暮るゝが習ひ、其上にて、成行は判明致さむ——いざ——一同参れつ。

と喇叭の音にて退場

### 第二場——戰場

敵襲を告ぐる警聲にてアルーマス、メツサラ登場

タプスル　いざ——メツサラ、馳せに馳せて、此書附を左翼の軍(カウシアス)へ御届けあれ、さて彼の一軍を以て直ちに攻めかゝる様致させたい、と申すは、敵軍の右翼なる、オクタピアス軍を見亘すに、意氣銷沈の俤め寄せよ。

がムる、此機を外さず、不意に起つて攻めかゝらば、勝利は期して待つべきのみ、いざ——メツサラ、馳せ付けよ、さて一軍總がゝりを以て責め寄せよ。

と一同退場

### 第三場——戰場の他の方面

敵襲の警聲、大鼓、喇叭、関の聲にて、手に鷲印の旗を携へたるカウシアス及びチ、ニアス登場

アカウシ　アレ見よチ、ニアス、味方の弱武者共が逃るわ——今は味方の軍勢が、某に取つては當の敵となれる淺ましき、これなる軍旗を携へし旗手はたもとも、敵に背を向け逃げそめしを、某手つから斬り棄て、彼が手



より奪ひ取つた次第でムる。

アチス、ニ おゝカツシアス殿、これも畢竟ブルータス殿が、號令早きに失した爲め、オクタビアス軍の隙を見て、餘りに急いたが過失の元、まつた我が軍兵は、アントニーが圍む所となりしも知らず、ブルータスが部下の兵は、分捕功名に心を奪はれ、一人の援兵をも、送り越さざる無情の舉動よまきり。

と警聲、軍鼓開の聲聞ゆるヒンダラス登場

ラヒス、ニ 御逃げなされ、我君、御逃げなされ、マールクス・アントニーが軍は早や、我軍の陣地を占領致してムる、カツシアス殿、もつとく遠方へ御落ちなされ。

アカスツシ いや此丘で十分（と軍旗をヒンダラスに與へながら）——アレ見られよチ、ニアス、

彼方に火の見ゆるが我軍の陣地なるか。

アチス、ニ いかにも左様でムる。

アカスツシ いやチ、ニアス、足下は何卒某が馬に騎り、一撻當て、彼方に見ゆる、軍勢の間近に馳せ寄り、味方の勢か敵勢か、とくと見定め参られよ。

アチス、ニ 畏まりましてムる、東の間に見届け参るでムらう。

とチ、ニアス退場

アカスツシ さらばヒンダラス、汝は此丘の頂に登りチ、ニアスの行衛を見張致せ、又戦場の模様を一々報告せ呉れよ、予は眼力薄きに依り、かくは汝に依頼致す。

とヒンダラス丘に登り行く





今四方より攻めかかるる所を以て取圍まれしニ、アス殿は馬騎兵を以て取圍まれし

想へば今月今日を以て、此世の光を見し某、天運循環して、此生を終るも今月今日、某が命數も早や是迄——ビンダラス、模様は何と。

ラヒ スンダ (丘の上) お、我君、

アカ スツシ 何と致した。

ラヒ スンダ チ、ニアス殿には、騎馬の兵を以て取圍まれ、今四方より攻めかゝらるゝ所を以て取圍まれ、なれどもチ、ニアス殿には、

まつしぐらに馬を進めまする——ヤア、やがて愈よ追付かれまする——ヤア、チ、ニアス殿が——ヤア馬を下りた者もムる——お、チ、ニアス殿も下りました——ちえ、生捕られましたわ——アレ御聞きなされ、敵奴が勝鬨を挙げまする。

と遠方にて鬨の聲喇叭の音聞ゆる

アカ スツシ 下りよビンダラス、最早見張には及ばぬ、あゝいつまで生存へて味方の將士が、我面前にて生捕らるゝを見てあらうぞ、我ながら卑怯千萬。

とヒスダラス丘を下り來る

此處へ來いビンダラス、當初バルジア(小亞細亞の地名)の戰場にて、予が汝を生擒なしたる時、汝が命を許す代償に、某が命ずる所を、何事にてあ



れ必ず遵奉致すべしと、一旦誓約致せしを、よも忘れは致すまい、今こそ其誓約を果した上、自由の民となるがよい、外でもない、これ此劍は、故シィザーが牀内の血液を潜りし名劍、汝之を取つて、某が胸を刺しやれ、いやさ口答は聞かぬ、いざ、早う柄を握れ、さて予が此様に顔を掩うたなら、それを合圖に刺し透せよ。

とビンダラス劍を取る、カツシアス自ら身を其上に投かけて倒れる

これにてシィザーが恨も晴れるであらう、公を刺したる其劍で、死するといふも逃れぬ因縁。

と息絶ゆる

ラヒンダ さて、これにて、此身は自由の身となつた。とはいへ、たとひ自

由の身とはならずとも、心にもない酷らしい、かやうな役目は致したうもなかつたわい——あゝカツシアス様、これより此ビンダラスは此國を遠く、後にして、羅馬人の目に留まらぬ、邊土の果に走り隠るゝてムリませう。さらばでムる、お許し下され。

とビン退場、敵襲の警聲聞ゆる

頭に桂冠を戴けるチ、ニアス及びメツサラ登場

サメラッ 想へば此度の戦争は、勝敗の交換とも申すべし、オクタビアス勢がブルータス勢に敗らるれば、カツシアス勢は、アントニー勢に敗らるる、アチハニ 乍去、此勝報(タルの)を聞かれたなら、カツシアス殿にも、嘸かし喜ばれて元氣付かるゝ事でムらう。

サメラッ してカツシアス殿には、何處に御在あるな。



アチ、ニ 奴隷のビンダラスと只だ二人、此丘の上<sup>しほ</sup>にいたう萎たれて入らせられます。

サメラツ (カシッアスの屍骸を認め) ヤ、彼處の地上に横臥せるは、カツシアス殿ではムラぬか。

アチ、ニ どうやら生ある者の、臥したる姿とも相見えぬ——やゝ一大事。

サメラツ カツシアス殿ではムラぬか。

アチ、ニ いやカツシアス殿は、早や此世に在されぬ、これなるは、カツシアス殿が昔の名残——おゝあの西に春く夕陽の、茜さす光の中に、闇夜の陰に沈み行く、先づ其如く、紅の血潮の中に、カツシアス殿が此世の日影は暮れ果てたり、羅馬の日輪は没し去つたり、我等が旅路の日も暮れたり。此上は雨も降れ、露も下りよ、如何なる危険も来らば来れ、我

等が此世の宿縁も早や盡き果てたり。某が承はりし使命の程を、危み疑ふの餘り、カツシアス殿には、かゝる椿事を仕出されたものと見ゆる。

サメラツ 吉報到来を危むの餘り、かゝる椿事を仕出されしか、おゝ疑念が生み出づる忌々しの過失<sup>あやまち</sup>、あらぬ幻影<sup>まぼろし</sup>を人の心に見するとは、さるにても胸に一點の疑あれば、芽ぐみ易きは過失の魔、此魔一度芽をふく時は、根幹共に枯死の危難は免れず。

アチ、ニ ヤイ、ビンダラス、ビンダラスは何處に居るぞ。

サメラツ チ、ニアス殿、貴殿はビンダラスを御探しなされ、其中某は、ブルータス殿の馬前へ馳付け、此凶報を以て御耳を貫き申さむ——嗟乎ブルータス殿の御耳には、太刀、劍の毒刃より、此凶報で抉らるゝが遙か



に辛い事ことでムらう。

アチニ 然らば御急ぎなされメツサラ殿、其中某は、ピンダラスが行衛を尋ねませう——。

とメツサラ退場

え、口惜しや、カツシマス殿には、何故某を御遣はしなされた、某は首尾克く味方の勢に、出遇うたではムらぬか、さて彼等は、此勝利の冠を某が額に載せ、歸つて之を貴殿に贈るべきやう申されたではムらぬか、其時彼等がどつと擧げたる、歡喜の叫び聲を、御聞つけはなされぬか、嗟乎、貴殿は萬事を思ひ違ひ遊ばされた、乍去此冠かんむりは、御額に御受けなされ、ブルターヌ殿より、貴殿に進らせよとの御頼みてムれば、某は其通りに致しまする——此上はブルターヌ殿、急いで此處へ御

出の上カイアス・カツシマス殿に對する某が誠忠の程を御覽下され——お、神々も御容赦あれ——こは羅馬武士の習ひでムる、いざカツシマス殿が劍を以て、チ、ニアスが胸も此通り。

と自刃して死する

敵襲の警聲にてメツサラを先頭としブルターヌ、小カトリ、ストラト、ウナラムニアス、ルシマス、登場

メツサラ 一 さてメツサラ、屍骸は何處にあるな。

サメラ 一 御覽あれ、彼處あそこにムりまする、チ、ニアスが、傍かたはらに哭し居りまする。

カトリ 一 ヤ、チ、ニアスが、仰向に伏し居るは、

メツサラ 一 何者にか殺害せられしならむ。

ブルターヌ 一 さてこそジュリアス・シーザーが、威力は今尙ほ衰へず、魂魄此世



に留まりて、我等が剣を、我から我が胸に向はしむるか。

カト さるにてもチ、ニアスがいみじき舉動、御覽あれ、彼の桂冠を死せるカツシアス殿が、頭に載せ置かれしは、適れ。

アス あゝ此二人ほど、健氣なる羅馬武士が、今の世に又とあるべきか、あゝ羅馬武士の名残とも申すべき御兩所、これが最後の見納めか、將來とても羅馬の地に、か程の勇士が又現るべしとも思はれず——あゝ方々、某が故人に對する情誼の程は、かばかりの涙で泣き足る程の仲では、ムらぬ——乍去此陣中危急の際、いつ迄悲嘆に暮るべきならず、カツシアス殿、何れ其折もあるてムらう——方々には、それ故早速此遺骸を、一先づサッソの島(近傍なるエーッ)へ御遣し下され、陣中で葬送を營みなば、我軍の銳氣を挫くてムらう——いざルシリアス

——いざカト、戰場へ罷り越さむ——ラベオ、フラビアスの兩將に、これより進撃を致させませう——最早や時刻も三時でムる、此上は日没前に再戦を試み、我等が最後の武運を試めすてムらう。

と一同退場

### 第四場——戰場の他の方面

敵襲の警聲にて、兩軍の兵士入亂れて戦ひながら登場、續いてアル、タス、小カト、ルシリアス等登場

アス ヤア、物共、盛返せ。

カト 何處の卑怯者が逃げ走るぞ、心あらむ者は拙者に續け——敵の奴原承れ、我こそはマ、カス、カト、一が、一子なるぞ、國民の忠友、虐主



の敵、マーカス・カトーが一子を知らぬか。

と敵兵を斬りまくる

タスル して又我こそはブルータス、同じく國民の忠友、マーカス・ブルータスなるぞ、ヤア、ブルータスが手並の程思ひ知れ。

と敵を追ひながら退場、此時カトーは力盡きて倒る。

アルシ お、健氣なるカトー殿、見受くる所御最期か、チ、ニアス殿に劣らぬ立派な御最期、大カトーの御一子と申し、御名は末代に残るてムらう。

甲敵兵 (ニルン向ひ) 降参致せ、抗うたら命はないぞ。

リル アシ よい、死ぬ爲めに降参致して遣す、又之を遣すに依つて、少しも早う拙者を殺して呉りやれ。

と金鐘を興ふる

かく申す拙者はブルータス、早や、ブルータスが首討つて、汝が功名に致せ。

甲敵兵 いや、首は討たれぬ——大切の生捕者。

乙敵兵 それアントニー様が御出なされた、ブルータス生擒の赴を言上致せ。

甲敵兵 いかにも言上致さう——ホー大將にはようこそこれへ。

とアントニー登場

我君に言上致します、敵將ブルータスを生擒致してムる。

ニアント ヤー何と、それは何處にある。

アルシリ いやアントニー、ブルータス殿は至つて安全の場所に居らせら



る、ハテ彼のブルータスとも云はる、御方が、おめく敵の生擒に  
なるものか、え、左様な憂き耻は、神々も御擁護あつて、何卒彼公が御  
身の上に下し給はるな——よしや彼公が、足下等の目に觸れうとて、  
生死共に、ブルータスの名に背かざる、天晴の舉動を、致されぬ事のあ  
るべきか。

ニアント (兵士等) ヤア物共、折角の功名ながら、これなるはブルータスには  
あらざるぞ、乍去ブルータスにも劣らざる、天晴の獲物なれば、其方共  
大切に預り置き、親切を盡して遣はせ、え、かやうなる天晴の武士を  
拙者は味方に持ちたいわい——いざ其方共、此上は更に進んで、ブル  
ータスの生死を尋ねよ、又オクタビアス殿の陣屋へ赴き、戦の模様を  
巨細に言上致せ。

と喇叭の囀子にて一同退場

### 第五場——戦場の他の方面

ブルータス、ダルダニアス(アルが從僕)、クリタス(全上)、ストラト(全上)、  
アス登場

クアスル 打漏されの郎等共、暫く此巖の上に息を休めよ。  
タクスリ さるにても彼のスタチリアス殿には、味方の將卒が、最期の様をも  
見届くべく、戦場指して出行かれ、兼て約束の松明を、一度は振上げて、  
味方に合圖を致されしが、未だに御歸りなされぬは、大方捕はれたか、  
討死致されたものと見えませす。

クアスル 下に居よクリタス、我等が命數の盡る所は、討死より外に道もな



いわ、いやクリタス、申聞けたい事がある。

と何事かクリタスに耳語く

タク スリ 何と仰せられまする、我君、何の様な事がムればとて、そればかりは御受け致されませぬ。

タプ スル 然らば黙り居らう、一言も申しては相ならぬ。

タク スリ 私は寧ろ自害致して失せたくらうりまする。

タプ スル 〝、然らばダルダニアス。

とダルダニアスに耳語く

ニダ アル スダ 此私に左様な事が成りませうや

タク スリ コレ、ダルダニアス。

ニダ アル スダ 〝、クリタス。

タク スリ 我君には何の様な難題を仰せられた。

ニダ アル スダ 我君を殺せよと仰せられた、アレ見よ彼の様に御爵よぎ込みなされてぢや。

タク スリ 彼の氣高い御身からだ中に、御憂悶が充ちちて、御眼の縁よち迄溢れてムる。

タプ スル 1 ヲアラムニアス殿、申入れたい事がムる、近う寄つて御聞下され。

ニダ アル スラ ム 何御用でムる。

タプ スル 1 餘の儀でもムらぬ、御聞下され前後二回——忘れも致さぬ、前にはサルデスの陣中にて、後には此フキリツビの戦場にて、遂昨夜の事でムる、大シーザーの亡靈が夜陰に乗じて、某の面前に現れました、それやこれやを思ふにも、所詮盡きたる某が命數。

ニダ アル スラ ム いや左様な事はムるまい。



マスル 某は確と疑ひませぬ、足下とても世の成行く様を、早や御覽なされたてムらう、我等は早や九死の淵に、追詰められた者でムる。

と微かなる警聲聞ゆる

今更逡巡躊躇して、敵に押落されうよりは、我から跳り入るが上分別、  
ヴララムニアス殿、足下はよもや御忘れあるまい、足下と此某とは相携へて寺小屋通ひを致した事もある竹馬の友、其昔の友誼にめて、  
某足下に御願がムる、と申すは此劍の柄を握つて、何卒走りかゝる某の胸に御當て下されい。

ニヴ  
アラム いや、それこそ友誼を知る者の、御受け致さるべき筋ではムらぬ。

と警聲尙ほ聞ゆる

マスル 御逃げなされ我君、いつまで御逗留あるべき所ではムりませぬ、  
マスル 其方はこれより、何處へなりと落ち延びよ、之が此世の暇なるぞ

——又其方にも同様なるぞ(これはタルダニアスに向ひての白)——ヴララムニアス、  
足下にも同様でムる——さてストラト、汝は今迄眠り居りしな、汝にもこれが永訣ぞや——想へば何れも永年の間、某に對し一方ならぬ厚誼の程、嬉しとも嬉しとも申様もない、我ブルータスは、今日戦に敗れたりと雖も、不義の勝利に誇り驕れる、彼のオクタピアス、并にマクアントニー等が、及びもつかぬ名譽をば、後代に残すてムらう。さらば何れも健固て參れ、ブルータスが舌は、これにて一生の歴史を語り盡したり、我眼の上に永闇の夜は暮れかゝれり、今日の最期を見む爲めに、此一身を支へ來れる我骨は、永切の寢床に急ぐなるを。



警聲 奥にて「お逃げなされお逃げなされ」と叫ぶ聲聞ゆる

タクリ お逃なされ我君、一先づこゝを御落ちなされませ。

タスレ 然らば其方は先づ逃げよ、拙者も後より追つかうぞ。

とクリタス、ダルダニアス、ヴァラムニアス退場

さてストラト、汝は主の側に留まり呉れよ、兼ね／＼心懸の殊勝な奴、  
汝が生涯は、義を以て一貫致せしよな、此上の依頼には、身共が劍を確  
と握り暫らく面を外に向け居よ、身共は奔りかゝつて生害致さむ、何  
とであるぞストラト。

ラスト ア、是非もムりませぬ、然らば先づ御手を下さりませう(最後の訣別)

(を許)さらば我君、これが御訣別てムりませぬ。

タスレ 達者で過ごせストラト——此上は、シーザー亡霊も、此世の妄執

を晴らし候へ、涙を吞んで貴殿を刺したる此某、只今心よく自害を致  
して果てます。

とストの持する劍に奔り懸つて自ら刺し死する

警聲 退軍の喇叭にてオクタヒアス、アントニー、メツサラ、ルシリアス  
及び軍勢登場

ピオクタ 此處に居るは何人なるぞ。

サメラツ 我君ブルータス公の僕でムる——ヤア、ストラト、我君には何れに  
在すぞ。

ラスト 我君にはメツサラ殿、浮世の人の束縛を、御遁れなされて々ムる、勝  
ち誇つたる敵人も、御亡骸を焼くより外に道もムるまい、ハテ我君に  
は御生害今は討取り奉つて、功名に致す敵もムるまい。



アルシリ　さもあらむ〜——嬉しやブルータス公、さてこそルシリアス  
が先刻の詞に間違ひはムらぬ。

ピオグスタ　さもあらばあれ、從來ブルータスに事へし輩は、拙者悉く召抱へ  
て、家臣となさむ心組、先づ汝は(スト)拙者に事へて、餘生を送らむ心  
はなきか。

ラスト　メツサラ殿より私を御推舉下されうならば、それは兎も角もてム  
りまする。

ピオグスタ　然らばメツサラ、左様致して呉りやれ。

サメラツ　先づストラト、我君が御最期の模様は何とであるぞ。

ラスト　私が御劍を持ち居る所へ、我君には奔りかゝつて、御果てなされま  
した。



【士武馬羅るたげ上見はスモールアラがな敵げへ想ああ】

サメラツ　オクタピウス殿然  
らば君に對して最後

迄、御奉公を致した此  
者何卒御家臣に御召  
抱え下され。

ニアント　あゝ想へば、敵な  
がらブルータスは、見

上げたる羅馬武士、餘  
の逆徒共は、たゞ、  
シーザーに對する私  
怨より、彼の様な大事



をもたくらみしにブルータス一人は、私怨、私慾の爲めならず、國家を  
思ふの一念よりこそ、一味徒黨にも加りたれ、一代の行爲は公明正大、  
其人となりは造化の神も、宇宙八紘に呼號して、これこそは大丈夫な  
れ」と誇らはしげに見えさせ給ふ。

ビオ  
アグ  
スタ 其高德に相應はしう、禮を盡し儀を厚らし、葬送の式を營むやう、  
我等に於て計らひ申さむ。今夜はともかくも、某が天幕の中に遺骸を  
安置し、武將の禮を以て、萬端鄭重に扱ひ申さむ——いて此上は、一同  
戎衣を解いて、休息致すやう布告致し、今日の此日の名譽をば、一軍に  
願つて凱旋致さむ。

と一同退場

幕

明治四十年八月七日印刷  
明治四十年八月十日發行  
大正元年八月十三日四版

シ  
ー  
ザ  
ー

定價金九拾錢

著  
者

戸 澤 正 保  
淺 野 和 三 郎

印  
發  
者  
兼  
刷  
行  
者

東京市京橋區銀座壹丁目廿二番地  
大日本圖書株式

代  
表  
者  
專務取締役 宮 川 保 全



沙 翁 全 集

發  
行  
所

東京市京橋區銀座壹丁目二十二番地

大日本圖書株式會社

郵便振替貯金口座東京二一九番



所賣販約特書圖版出社會式株書圖本日大

北海道 經文會。一二堂。富貴堂。川南。東京府 丸善。林平。大倉。水野。青野。三友。内田。杉本。文林堂。北隆館。文星堂。中西屋。東京堂。文會堂。勉強堂。二松堂。松邑。東海堂。有隣堂。十字屋。良明堂。森江。徳川。弘集堂。勉強堂。新潟縣 北光社。高桑。覺張。目黒。野島。西村。高松堂支店。埼玉縣 高野。群馬縣 煥乎堂。千葉縣 多田屋。茨城縣 明文堂。川又。寺田。栃木縣 煥乎堂分舖。青木。三重縣 岩田。安屋。愛知縣 川瀬。永東。静岡縣 吉見。谷嶋屋。三原屋。大石。山梨縣 柳正堂。岐阜縣 郁文堂支店。長野縣 日新堂。水琴堂。朝陽館。西澤。盛文堂。宮城縣 藤崎。英華堂。金港堂。福島縣 岳堂。巖手縣 佐藤。文明堂。青森縣 青鶴堂。今泉。今泉支店。山形縣 盛文堂。牧野。八文字屋。秋田縣 曙堂。東海林。藤島。富山縣 中田。學海堂。清明堂。京都府 若林。松田。大阪府 柳原。松村。開成館。寶文館。三宅。小谷。北村。今井。兵庫縣 熊谷。石田。福浦。竹内。樂師寺。中井。長崎縣 松崎。奈良縣 文進堂。滋賀縣 廣田。福井縣 品川。石川縣 宇都宮。鳥取縣 徳岡。今井。久松堂。鳥取縣 川岡。岡山縣 山陽書籍會社。廣島縣 積善館。芸香堂。山口縣 含英堂。梅龍堂。日新堂。日新堂支店。超世館。秋田縣 平安堂。徳島縣 靜壽堂。香川縣 開益堂。開文會。愛媛縣 向井。土肥。足立。高知縣 富士。福岡縣 佐野。積善館。博文社。金文堂。大分縣 甲斐。中園。梅津。佐賀縣 牧川。平井。五郎川。熊本縣 長崎。宮崎縣 修進堂。鹿兒島縣 吉田。金光堂。沖繩縣 小澤。臺灣 新高堂。

製本町五

明治四十四年一月

沙翁全集

沙翁全集は抄譯に非ず 梗概に非ず 忠實と親切とを旨としたる完全譯なり 文壇の至寶として永く後世に傳ふべきものは即是なり

次 目 總

既刊  
 第一卷 ハムレット 姑射譯 定價金八拾五錢 郵稅拾錢  
 第二卷 ロメオとジュリエット 姑射譯 定價金八拾錢 郵稅拾錢  
 第三卷 ヴェニス商人 馮虛譯 定價金八拾錢 郵稅拾錢  
 第四卷 オセロ 姑射譯 三月出版  
 明治三十九年三月以後に於て發刊すべきもの左の如し  
 ○ダイタス、アンドロニカス  
 ○顯理六世上篇  
 ○全 中篇  
 ○全 下篇  
 ○戀の無駄骨折  
 ○間違の喜劇  
 ○ヴェロナの二貴人  
 ○リチャルド三世  
 ○夏の夜の夢  
 ○リチャルド二世  
 ○ジョン王  
 ○悍婦ならし  
 ○顯世四世上篇  
 ○全 下篇  
 ○面白きインザア的女房達  
 ○から騒ぎ  
 ○顯理五世  
 ○御意の女  
 ○十二夜  
 ○シーザー  
 ○終よき皆よし  
 ○しつぺい返し  
 ○トロイラス、クレシダ  
 ○リア王  
 ○マクベス  
 ○アントニー、クレオパトラ  
 ○アゼンスのタイモン  
 ○コリラレーナス  
 ○ペリクリイズ  
 ○シムベリン  
 ○あらし  
 ○冬物語  
 ○顯理八世

社 會 式 株 書 圖 本 日 大

全部 三十七卷  
 每卷約四百頁  
 數ヶ月毎に一卷宛  
 刊行の豫定なり



定期刊行

帝國文學 每月發行 定價金拾五錢 郵稅壹錢

丁酉倫理講演集 每月發行 定價金貳拾錢 郵稅壹錢

教育研究 每月發行 定價金貳拾錢 郵稅壹錢



好評三版  
文學士 片山正雄著  
男女と天才

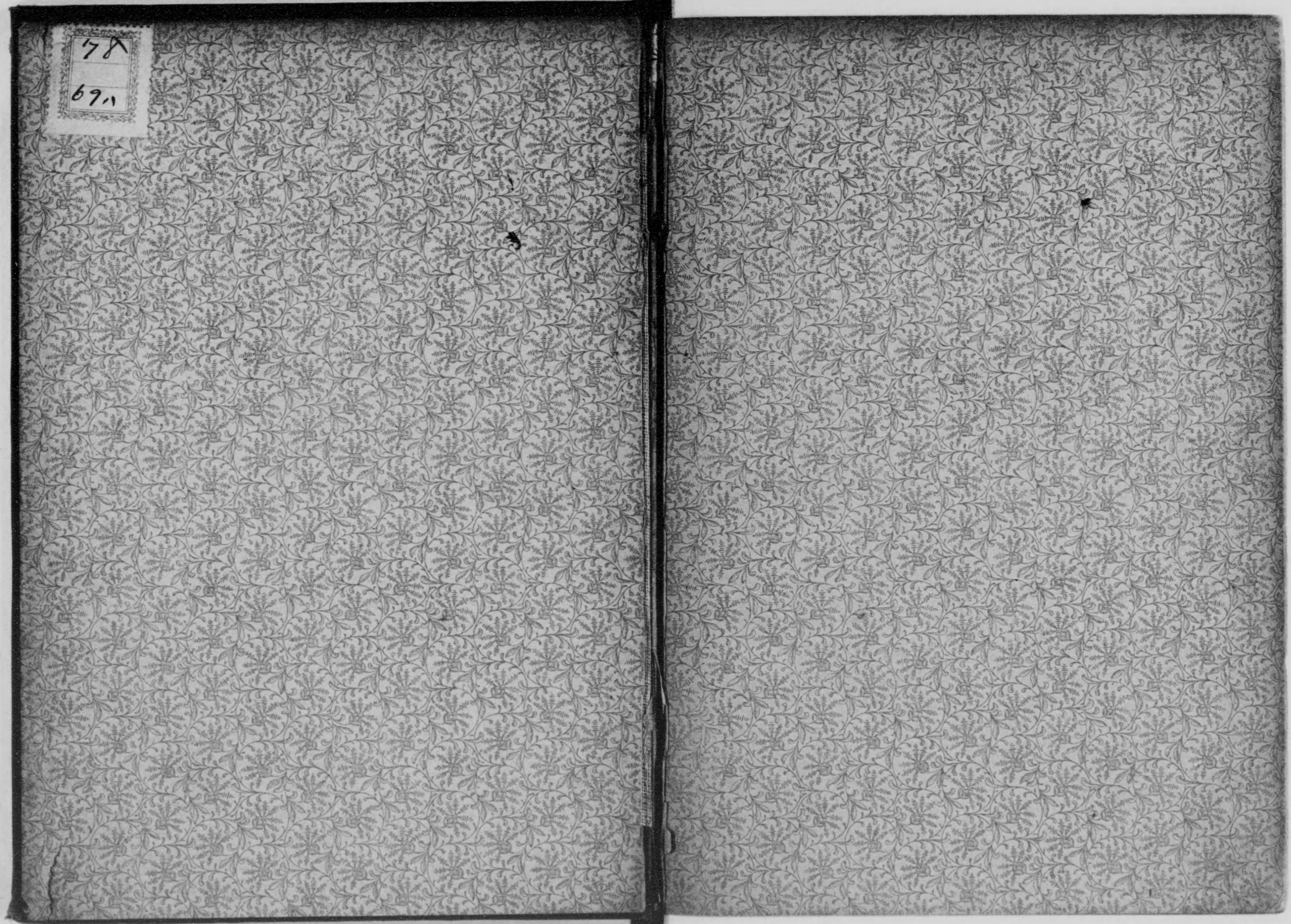
美裝一冊(定價六拾五錢 郵稅拾錢)

帝國文學會編纂

百號紀念	全一冊	定價金參拾錢 郵稅壹錢
明治三十七年新年號	全一冊	定價金參拾五錢 郵稅壹錢
第一懸賞小說と講演	全一冊	定價金貳拾五錢 郵稅壹錢
文豪小泉八雲	全一冊	定價金貳拾五錢 郵稅壹錢
創刊十週年紀念號	全一冊	定價金拾五錢 郵稅壹錢
臨時シルレル紀念號	全一冊	定價金四拾五錢 郵稅壹錢



78  
691





終